

## ジェンダーの視点による音楽科教科書の分析

～1998年版「学習指導要領」準拠小・中学校音楽科教科書の分析と考察～

中山裕一郎（教育学部芸術教育講座）

手塚 綾（教育学部大学院）

山下貴幸（教育学部大学院）

渡辺亜希子（教育学部大学院）

### はじめに

ジェンダーの視点から学校文化を見直すことにより、これまで見えなかった或いは見えにくかった〈性差〉（＝ジェンダー格差）意識の強化・再生産装置としての学校の諸相が明らかになってきた。

1995年9月に北京で開催された世界女性会議では、女性の地位の強化（エンパワーメント）や男女格差の解消について中心的な議論がおこなわれた。会議を通し、ジェンダーの視点から見た学校教育の問題点についても議論の俎上に乗せられた。同会議は、西暦2005年までに、初等・中等教育の場に存在する〈性差〉を全面的に解消することを行動要領の重要な柱の一つとして採択し、12日間続いた会議の幕を閉じている。

日本ではどうか。2005年を目前にした今日、公教育の場における〈性差〉は解消の方向に確実に向かっていると言えるだろうか。北京での世界女性会議以降、上記のようなジェンダーの視点からの学校教育の在り方や教育内容についての検討が市民団体を中心に行われるようになった。それらの取り組みの中に、子どもたちが日常的に手にする教科書の分析がある。教科書の記述、描かれた挿絵、その背景にある編纂者の意識などについての批判的分析である。これまで音楽科教科書をそのような視点で分析した研究に、木村・中山（1994, 1996）と21世紀教育問題研究会（1994）による研究がある。分析に関する視点と方法は、両者にほぼ共通している。木村・中山による1994年の研究は、戦前・戦中に使用された代表的な音楽（唱歌）科教科書を対象に、1)歌詞における主体の性別による分類 2)挿絵に描かれた〈性差〉 3)作詞・作曲者の性別、の3点を柱に分析をおこなっている。木村らによる1996年の研究では、1980年代後半から1990年代前半にかけて使用された音楽科教科書を対象に、あらたに教科書編者の性別を分析項目に加え考察している（木村・中山 1994）。また、21世紀教育問題研究会による1994年の研究は、1989（平成元）年版「学習指導要領」準拠の音楽科教科書にのみ対象をしぼり、1)歌詞における主体の性別による分類 2)挿絵に描かれた〈性差〉の2点についてのみ分析をおこなっている（21世紀教育問題研究会 1994）。

これらの研究を通じ、教材の歌詞には「わたし」という女子を想起させる主体語に対し「ぼく」という男子主体の語句が圧倒的に多く用いられていること。また、挿絵も含め、性によるステロタイプな役割分業や「男らしさ」や「女らしさ」といった〈性差〉意識を形成・助長する可能性のある表現が多いこと、などが分かった。木村・中山による教材曲の作詞・作曲者及び教科書編者の性別による分類からも、音楽科教科書が総体として男性の手によって作られてきたことについても理解された。

さて、本研究は、1998年版「学習指導要領」準拠の小・中学校音楽科教科書を、木村らによる上記の方法によって分析し、内容に対し考察を加えたものである。使用した教科書はいずれも2002（平成14）年版であり、教科書名と出版社名とは以下の通りである。

- 小学校 ①『新しい音楽』シリーズ（東京書籍） ②『小学生の音楽』シリーズ（教育芸術社）  
 ③『音楽のおくりもの』シリーズ（教育出版社）  
 中学校 ①『中学生の音楽』（教育芸術社） ②『音楽のおくりもの』（教育出版社）

## 音楽科教科書の分析

### 1) 歌詞における主体の性別による分類

2002年度版小学校音楽科教科書は3社から出版されている。その3社3種の教科書に掲載されている歌唱教材の総数は計494曲。それらの教材の歌詞の主体の性別について調査した。歌詞における主語が「ぼく」というように男性が主体であると思われる場合は「男」,「わたし」というように女性が主体であると思われる場合は「女」,「ぼく」と「わたし」の両方の語が用いられている場合は「男女」, またそれらのいずれにも該当しない場合は「その他」というように4つのカテゴリーに分類した。結果は〈表1〉の通りである。

〈表1〉 歌詞における主体の性別による分類（小学校）

「教科書名」出版社名	男	女	男女	その他	計
「新しい音楽」東京書籍	12 (7.5%)	11 (6.9%)	1 (0.7%)	135 (84.9%)	159 (100%)
「小学生の音楽」教育芸術社	49 (27.7%)	6 (3.4%)	1 (0.6%)	121 (68.4%)	177 (100%)
「音楽のおくりもの」教育出版	27 (17.1%)	10 (6.3%)	2 (1.3%)	119 (75.3%)	158 (100%)
計【曲数】 (%)	88 (17.8%)	27 (5.5%)	4 (0.8%)	375 (75.9%)	494 (100%)

〈表1〉の小学校用音楽科教科書では、曲の述べ総数494曲中、「男」主体の曲が88曲（17.8%）であり、「女性」主体の27曲（5.5%）に対し、3倍以上多い。「男女」が同一曲に主体としてあらわれる曲は4曲（0.8%）であり、全体のわずかに1パーセントに満たない。375曲（75.9%）と全体の8割近くを占めるのは人間以外の動物を主体としたり男女の性が明示されていない曲である。また、この男女の比率の対比は教科書（出版社）によっても特徴がある。「新しい音楽」（東京書籍）では「男」と「女」の数がほぼ同数（同率）であるのに対し、「小学生の音楽」（教育芸術社）では49曲（27.7%）と6曲（3.4%）というように、「男」主体の曲が「女」主体の曲の実に8倍以上となっている。

〈表2〉 歌詞における主体の性別による分類（中学校）

「教科書名」出版社名	男	女	男女	その他	計
「中学生の音楽」教育芸術社	14	5	1	55	75
「音楽のおくりもの」教育出版	8	7	0	56	71
計【曲数】 (%)	22 (15.1%)	12 (8.2%)	1 (0.7%)	111 (76.0%)	146 (100%)

〈表2〉は、中学校音楽科教科書における歌唱教材の分類結果である。曲の述べ総数146曲中、「男」主体の曲が22曲（15.1%）であり、「女」の12曲（8.2%）に対し、2倍近くも多い。「男女」そして「その他」に分類された曲の数的傾向は、小学校の場合とほぼ一致している。ここでも教科書（出版社）

により、「男」「女」のそれぞれが占める比に傾向の差異が見られる。「音楽のおくりもの」(教育出版)では主体としての「男」と「女」がほぼ同数数えられるのに対し、「中学生の音楽」(教育芸術社)では「男」主体の曲が「女」主体のその3倍近くあった。

小学校及び中学校の音楽科教科書全体を通し、歌詞における主体としての「男」「女」「男女」「その他」の全般的傾向は、先行研究における結果とほぼ一致している(木村・中山 1994, 1996)。しかしながら、小学校における東京書籍と中学校における教育出版の2社の教科書に見られたような傾向は、これまでになかったものである。そこでは、「男」と「女」それぞれが、歌詞における主体として対等に登場している。

次に、「男」「女」それぞれに分類された歌唱教材の歌詞の内容に注目してみたい。

まず、「ぼく」という男性主語が、どのような語句やイメージと対応しているかについて、小学校音楽科教科書に掲載された歌唱教材の歌詞から見ることにする。

### 《小学校》

- 1) 「もしもコックさんだったなら」(山本瓊子作詞・小宮路敏作曲 『音楽のおくりもの』3 教育出版 p. 46)

「1. もしも**ぼく**がコックさんだったなら ほっきよくのこおりのなかに さとうとミルクを入れて とびきりじょうとうの アイスクリームをつくりたい  
2. もしも**ぼく**がコックさんだったなら たいへいようのスープのなかに おそらのわたぐもいれて とびきりじょうとうの シチューをつくりたい」

- 2) 「うちゅう人にあえたら」(石井亨作詞・作曲 『新しい音楽』2 東京書籍 pp. 4～5 pp. 48～49)

「1. そらをとびたい(シューッ) ロケットにのって(シューッ) ほしがひかるうちゅうへ まっしぐら うちゅうの人に(シューッ) もしかあえたら あくしゅして あくしゅして ともだちになろう ことばはなんだかわからないけど ぼくたちがうたえば きつとうちゅうのひとも ラリロラリロラリロラリロラリロラリロ うたってくれる」

- 3) 「歌のにじ」(佐田和夫作詞・岡部栄彦作曲 『小学生の音楽』4 教育芸術社 pp. 8～9)

「1. 歌声 高くひびけ 空までとどけ まぶしい春の光うけてひろがれ ぼくたちの歌声で 空ににじをかけよう きぼうの色にそめて どこまでも」

- 4) 「ゴーゴーゴー」(運動会の歌)(花岡恵作詞・橋本祥路作曲 『小学生の音楽』4 教育芸術社 p. 49)

「1. ぼくらは かがやくたいようのように もえあがるきぼう ちからいっぱい がんばろう あかあかあか ゴーゴーゴー あかあかあか ゴーゴーゴー もえろよもえろ あかぐみ」

- 5) 「旅立ち」(なかにし礼作詞・湯山昭作曲 『新しい音楽』6 東京書籍 pp. 38～39)

「1. きみは きみのみちをあゆめ ひとすじに そのみちを ぼくは ぼくのゆめにいきる このゆめに あのほしへ まっしぐら あのほしをつかめ きみはひがし ぼくはにしへ わがともよ たびだちだ」

1) の「もしも**ぼく**がコックさんだったなら」では、「ぼく」という男性主語と「コックさん」という職業としての料理人の仕事のイメージとが結びつけられて歌われている。同時に、「ほっきよくのこおりのなかに さとうミルクを入れて」というように、描かれる主体の行動に、ダイナミズムとロ

マンティックな夢想とが感じられる。2) の「うちゅう人にあえたら」は、ロケットに乗って宇宙に飛び出し、遠い未知なるもの=宇宙人との出会いと、それとのコンタクトをおそれずにはかろうとする内容の曲。東京書籍版の場合、この曲は2カ所に掲載されている。教科書のトップ頁には歌詞と共に男女の児童が歌っている写真が掲載されている。2番の歌詞もあるが、1, 2番共に「ぼく」という男性主語のもとで歌われている。3) の「歌のにじ」は、2) と同様、歌声の力で空に虹をかけようというような力強く希望に満ちた雄大なイメージが「ぼく」(1, 2番共に) という男性主語で歌われている。4) の「ゴーゴーゴー」は、運動会の応援歌として掲載されているが、「かがやくたいよう」「希望」「力強さ」といった前向きでプラスのイメージがここでも「ぼくら」(1, 2番共に。数字の表示はないが、実質的に2番まで歌詞がある。) という男性主語によって歌われている。5) は、自分の思い(「ゆめ」) に忠実に生きていくことを決然と宣言している。この歌はクワドリベットのように、2つの異なった歌詞とメロディーによって2群に分かれたグループによって同時に歌われる。歌詞中、「わたし」という主語も登場するが、その部分は「わたしはわたし あいするはながある・・・」であり、「ぼく」を主語として歌われる部分と世界を異にしている。

次に、中学校における「男性」主体の歌詞の例を見てみることにする。

#### 《中学校》

- 1) 「光の中へ」(風戸強作詞・森崎貴敏作曲 『音楽のおくりもの』1 教育出版 pp. 32~33)  
 「1. さあ とびだそう ひかりのなかへ キラキラかがやく ぼくらのせかいへ そこにはゆめが まっている いのちをもやして すすむんだ さあとびだそう ひかりのなかへ なにかがはじまる ぼくらのせかいへ」
- 2) 「マイバラード」(松井孝夫作詞・『音楽のおくりもの』2・3 上 教育出版 pp. 4~5)  
 「1. みんなでうたおう ころをひとつにして かなしいときも つらいときも みんなでうたおう おおきなこえをだして はずかしがらずに うたおうよ ころもえるうたが うたがきつときみのもとへ きらめけ せかいじゅうに ぼくのうたをのせて」
- 3) 「明日という大空」(平野祐由香里作詞・橋本祥路作曲 『中学生の音楽』1 教育芸術社 pp. 4~5)  
 「1. 僕たちの行く手には 明日という大空 大空がある 果てしなく広がる空へ 飛び立とう どこまでも 遠く高く 心の翼で力の限り 輝く朝に出会えるまで」
- 4) 「思い出は空に」(秋葉てる代作詞・川崎祥悦作曲 『中学生の音楽 2-3 上』 教育芸術社 pp. 62~63)  
 「・・・夢よ飛べ 彼方へ 歌よ飛べ あこがれを乗せ 今 旅立つぼくらの 限りない未来をめざして・・・」

1) の歌詞の中にある「ひかりのなか」は字義通り輝かしい約束された場所そのものであり、そのような場所に向かって主体である「ぼく」は果敢に飛び立とうとしている。「ぼくらのせかい」という部分は、そのような場所や行為そのものが男性にのみに許されているという、ある種の排他的印象さえも感じさせる。2番の歌詞の主語も「ぼくら」である。2) は、男性主語と広く大きな世界というイメージが対をなしている例といえる。2番の歌詞も主語は「ぼくら」である。3), 4) も同様であり、今いる場所から、「果てしなく広がる空」の彼方にある「輝く朝」や「限りない未来」という希望へ向かい、大きく羽ばたこうとする男の子のイメージが浮かぶ。

教科書の歌詞における男性のイメージは、希望に溢れ、力強く、たくましく、勇気に満ちているというものがほとんどを占めており、「世界」という歌詞と関連して出てくるものも多かった。これは男性の「特性」として語られやすい「ロマンチックな感情」や「大きな野望」と対をなす表現と言えよう。次に、女性をイメージさせる「わたし」や「わたしたち」といった主語を持つ歌詞の例を見ることにしたい。

#### 《小学校》

- 1) 「たなばたさま」(権藤花代/林柳波作詞・下総皖一作曲 『音楽のおくりもの』1 教育出版 p. 48)

「2. ごしきのたんざく わたしがかいた おほしさまきらきら そらからみてる」

- 2) 「さんぽ」(中川李枝子作詞・久石譲作曲 『音楽のおくりもの』2 教育出版 p. 50)

「1. あるこう あるこう わたしはげんき あるくのだいすき どんどんゆこう さかみち  
トンネル くさっぱら いっぱんばしに でこぼこじやりみち くものすくぐって くだり  
みち」

- 3) 「つばさをください」(山上路夫作詞・村井邦彦作曲 『音楽のおくりもの』6 教育出版 pp. 30~31)

「1. いまわたしの願いごとが かなうならば つばさがほしい この背中に 鳥のように 白  
いつばさ つけてください この大空に つばさを広げ 飛んで行きたいよ 悲しみのない  
自由な空へ つばさはためかせ 行きたい」

1) の「たなばたさま」は、七夕で短冊に願い事を書き、その願い事の実現を心の中でそっと祈る姿が、「ぼく」ではなく、女性性を表す「わたし」という主語で歌われる。ある種の他力本願的なイメージや運命論的な生き方と女性性とを結びつける要素が、この歌詞の中にまったくないとは言えない。これに対し2), 3) の曲の歌詞に登場する「わたし」は、行動的で意志的である。これまでの「わたし」(=女性)が示してきた世界と、イメージと大きく異にしている。この内、3) の「つばさをください」は、1970年代初めにフォークソングとして歌われ、その後も多くの歌手によって歌いつがれ、教科書にも数多く取り上げられてきた作品である。既存の価値や富を捨ててまでも「白い翼」を得て「大空」へ飛び立ちたいという主体が、「わたし」という主語によって歌われる。「わたし」は、女性をイメージさせる主語ではあるが、両性が共有しうる主語でもある。男性と女性の双方が、違和感なく自分自身を歌詞の主体としてシンクロさせて歌うことの出来る数少ない歌であるように思われる。人々によって長く歌い継がれている要因の一つとして、このような点が挙げられるのではないだろうか。

中学校における「わたし」を主語とした歌唱教材の歌詞も、小学校とほぼ同様の傾向を示している。

このように、「ぼく」を主語とした歌詞の内容が、依然、ステロタイプと言えるほどに同様のイメージを提示しているのに対し、音楽科教科書に掲載された「わたし」を主語とする教材の歌詞は、少しずつ変化しつつあるように思われる。それらの中には、男女の両性が共有しうる主語「わたし」を用いることにより、単なる性による腑分けを超え、同じ人間としての生き方や願いを歌った歌も存在している。「つばさをください」の他に、中学校の教科書に掲載されている新川和江の詩による「名づけられた葉」(飯沼信義作曲 『中学生の音楽』2・3 下 教育芸術社 pp. 66~69) も、そのような可能性を持つ作品のように思われる。

「・・・私も一枚の葉に過ぎないけれど 熱い血の樹液を持つ 人間の歴史の幹から分かれた  
小枝に不安げにしがみついた幼い葉っぱにすぎないけれど 私は呼ばれる 私だけの名で朝に夕  
に」

## 2) 写真, 挿絵に見る<性差>表現

挿絵は, 子どもたちに歌の内容や雰囲気伝える重要な役割を果たし, 視覚的な面は感性に直接訴えかけ易いものである。従って無意識のうちに子どもたちが影響を受ける可能性がある。

以上のことから, 挿絵は学習者に対して, 歌詞の内容に比べ, 遜色がないほどに大きな意味を持っていると言えるのではないだろうか。

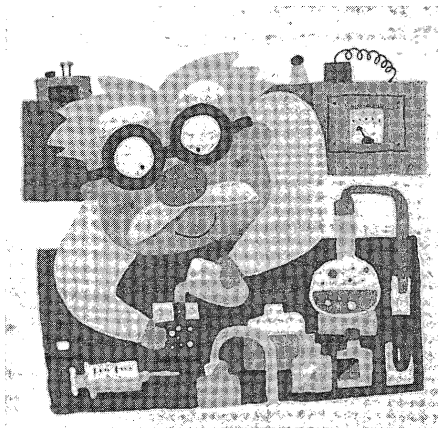
このような点に注目し, 子どもの性差意識を助長, 固定化する可能性のある挿絵を〔資料〕で取り上げた。ここでは代表的な例のみしかあげられないが, このような例を見てみると, 男女の伝統的性差意識を形成・固定化する可能性のある挿絵表現が使用されていることが分かる。

〔資料1〕の①では科学者は男性, ②では船長は男性, ③では茶摘みは女性というように, 特定の職業と性とを固定化させる可能性が指摘できる。次の④では, 子守をするのは女性, ⑤ではクマのぬいぐるみを赤ん坊の様にあやす女の子が描かれており, 育児は女性の役割というようなイメージを抱かせる例である。⑥では, 演奏者全員が男性で占められている。管楽器を含め, 女性演奏者も多数存在する現在において不自然な挿絵であるといえよう。

以上のように性差役割分担の例は中学生の教科書にも言えることであり, 音楽の教科書は<性差>意識を子どもたちの内部に形成し, 助長する役割を一定量果たしている可能性が大きいと言えよう。

しかし, 2002年度版の音楽の教科書では, 以前のものよりも改善されている部分も見られる。1980～1990年代にかけての教科書では, ⑦で見るようにほとんどが, 男子が大太鼓をたたき写真や絵が使われていた。しかし, 2002年度版の教科書では, ⑧で見るように, 女の子が大太鼓をたたき写真も多数用いられている。従来の音楽科教科書における挿絵と比較し, 性差(的)表現を弱めようとする配慮や編集意図を感じとることが出来る。

〔資料〕



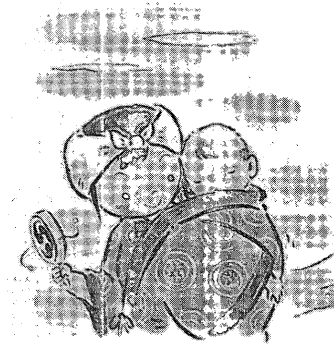
① 「ふしぎはかせのだいはいつめい」  
(【新しい音楽】2 東京書籍 2002)



② 「陽気な船長」  
(【小学校の音楽】4 教育芸術社 2002)



③ 「茶つみ」  
(【新しい音楽】3 東京書籍 2002)



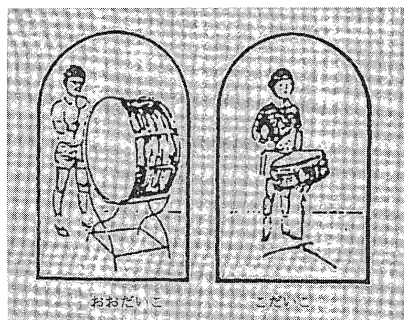
④ 「子もり歌」  
(【新しい音楽】5 東京書籍 2002)



⑤ 「じゃんけんぽん」  
(【小学校のおんがく】1 教育芸術社 2002)



⑥ (【音楽のおくりもの】6 教育出版 2002)



⑦ (【新しい音楽】1 東京書籍 1980)



⑧ (【新しい音楽】3 東京書籍 2002)

## 3) 作詞・作曲者の性別による分類と&lt;性差&gt;

現在、教科書に記載されている曲の作詞者・作曲者の男女の割合をまとめたものが《表3》,《表4》である。《表3》の数値は、木村と中山による1996年の集計による(木村・中山 1996)。

《表3》作詞者・作曲者の性別による分類と&lt;性差&gt; (1980～1994年度版)

	総曲数	作詞者			作曲者		
		男	女	その他	男	女	その他
小学校(%)	2533(100%)	1291(51.0%)	709(28.3%)	533(20.7%)	1646(65%)	30(1.2%)	857(33.8%)
中学校(%)	1223(100%)	826(67.5%)	216(17.7%)	181(14.8%)	1036(84.7%)	17(1.4%)	170(13.9%)
総数(%)	3756(100%)	2117(56.4%)	925(24.6%)	714(19.0%)	2682(71.4%)	47(1.3%)	1027(27.3%)

《表4》作詞者・作曲者の性別による分類 (2002年度版)

	総曲数	作詞者			作曲者		
		男	女	その他	男	女	その他
小学校(%)	470(100%)	249(53.0%)	129(27.4%)	92(19.6%)	325(69.1%)	15(3.2%)	130(27.7%)
中学校(%)	146(100%)	75(51.4%)	52(35.6%)	19(13.0%)	109(74.7%)	19(13.0%)	18(12.3%)
総数(%)	616(100%)	324(52.6%)	181(29.4%)	111(18.0%)	434(70.5%)	34(5.5%)	148(24.0%)

この分類表から、依然として作詞者・作曲者ともに男性の割合が多いことが分かる。

しかし、《表3》の数値と《表4》の数値とを比べると、中学校教科書における作詞者・作曲者に占める女性の割合が、作詞者でほぼ2倍、作曲者では10倍近くになっている。さらに、小学校教科書での作曲者も女性に占める割合がほぼ3倍になっている。

以上のことから、まだ割合が男性より遙かに少ないながらも、現在の教科書では、先行研究を行った以前よりも、女性の作品が多く取り上げられるようになったといえよう。

このことは近年、女性の職業としての作曲家が増え、多くの女性作曲家の活躍が見られることと、女性を含めた教科書づくりをするという教科書編集社の配慮が見られることが要因になっているといえよう。

さらに、2002年度版教科書を出版社別に作詞者の割合をまとめたものが《表5》,作曲者の割合をまとめたものが《表6》である。



《表 5》 出版社別の作詞者の性別による分類 (2002 年度版)

	男 (%)	女 (%)	その他 (%)	総数 (%)
「新しい音楽」東京書籍 (小学校)	95 (59.4%)	35 (21.9%)	30 (18.8%)	160 (100%)
「音楽のおくりもの」教育出版 (小学校)	80 (50.6%)	38 (24.1%)	40 (25.3%)	158 (100%)
「小学生の音楽」教育芸術社 (小学校)	74 (48.7%)	56 (36.8%)	22 (14.5%)	152 (100%)
「音楽のおくりもの」教育出版 (中学校)	45 (63.4%)	11 (15.5%)	15 (21.1%)	71 (100%)
「中学生の音楽」教育芸術社 (中学校)	30 (40.0%)	41 (54.7%)	4 (5.3%)	75 (100%)

この《表 5》にあるように、小学校教科書は、どの出版社も女性作詞家の割合が高いことが分かる。さらに、小・中学校ともに、教育芸術社の教科書が女性作詞者作品を多く用いていることが分かる。

《表 6》 出版社別の作曲者の性別による分類 (2002 年度版)

	男 (%)	女 (%)	その他 (%)	総数 (%)
「新しい音楽」東京書籍 (小学校)	104 (65.0%)	2 (1.3%)	54 (33.8%)	160 (100%)
「音楽のおくりもの」教育出版 (小学校)	113 (71.5%)	4 (2.5%)	41 (25.9%)	158 (100%)
「小学生の音楽」教育芸術社 (小学校)	108 (71.1%)	9 (5.9%)	35 (23.0%)	152 (100%)
「音楽のおくりもの」教育出版 (中学校)	56 (78.9%)	5 (7.0%)	10 (14.1%)	71 (100%)
「中学生の音楽」教育芸術社 (中学校)	53 (70.7%)	14 (18.7%)	8 (10.7%)	75 (100%)

次に《表 6》作曲者を見てみると、いずれの出版社も女性作曲家に占める割合が少ない。しかし中には、教育芸術社の中学校版における女性作曲者の割合が最も高い。

以上のことから、出版社別では作詞者作曲者ともに、教育芸術社が女性を多く起用していることが分かる。

#### 4) 教科書編著作者の性別による分類

教科書著作者を性別により分類をしたのが、《表 7》《表 8》である。《表 7》の数値は、木村と中山による 1996 年の研究による (木村・中山 1996)

《表 7》 教科書著作者の性別による分類 (1980 ~ 1994 年度版)

	教科書総数【シリーズ別】	著作者総数【延べ人数】	女	男	不明
小学校 (%)	15	253 (100%)	10 (4.0%)	243 (96.%)	0 (0%)
中学校 (%)	13	113 (100%)	7 (6.2%)	106 (93.8%)	0 (0%)
総計 (%)	28	366 (100%)	17 (4.6%)	349 (95.4%)	0 (0%)

《表 8》 教科書著作者の性別による分類 (2002 年度版)

	教科書総数【シリーズ別】	著作者総数【延べ人数】	女	男	不明
小学校 (%)	18	36 (100%)	5 (13.9%)	28 (77.8%)	3 (8.3%)
中学校 (%)	5	34 (100%)	3 (8.8%)	30 (88.2%)	1 (2.9%)
総計 (%)	23	70 (100%)	8 (11.4%)	58 (82.9%)	4 (5.7%)

《表7》《表8》を比較すると、教科書著作者に占める女性の割合が大きく増加していることが分かる。しかし、依然として、小・中学校ともに男性が著作者がほとんどの割合を占め、女性はわずかにすぎないことが分かる。

更に2002年版度教科書の編著作者を出版社別に分類したものが《表9》である。

《表9》出版社別に見る教科書編著作者の性別による分類（2002年度版）

教科書名	男(%)	女(%)	不明(%)	総数(%)
「新しい音楽」東京書籍(小学校)	7(63.6%)	2(18.2%)	2(18.2%)	11(100%)
「音楽のおくりもの」教育出版(小学校)	13(76.5%)	3(17.6%)	1(5.9%)	17(100%)
「小学生の音楽」教育芸術社(小学校)	8(100%)	0(0%)	0(0%)	8(100%)
「音楽のおくりもの」教育出版(中学校)	16(80.0%)	3(15.0%)	1(5.0%)	20(100%)
「中学生の音楽」教育芸術社(中学校)	8(100%)	0(0%)	0(0%)	8(100%)
「中学生の音楽」教育芸術社・器楽(中学校)	6(100%)	0(0%)	0(0%)	6(100%)

この《表9》から、いずれの出版社も女性の占める割合の少ないことが分かる。中でも教育芸術社の教科書編著作者の中には、女性が一人も含まれていない。

従って、表における男女の占める割合から判断すると、女性の占める割合が増加傾向にあるが、十分といえない。このようなことから、男女平等の立場からの教科書作りを目指すには、まだ改善が必要だと思われる。

#### まとめ（考察）

以上、4つの視点から、1998（平成10）年版学習指導要領に準拠した最新版の音楽科教科書の分析を行なった。以下、分析の結果についてまとめてみたい。

歌詞による主体の性別分類では、男性あるいは女性のいずれにも属さないものが全体の大部分を占めていた。この結果は以前の研究と同様であった。しかし、男性と女性を比べると男性主体の歌詞の方が多かった。この結果も先行研究と同様である（木村・中山 1994, 1996）。教科書内の男女におけるそれぞれの特定のイメージとしては、男性は勇敢である、たくましい、希望に溢れるなどの姿が挙げられる。それに対して女性は、美しいもの、一つの場所にとどまり管理していく、育児をするというイメージが挙げられる。このことから、教科書における男性・女性像の在り方は以前と比較し、基本的な部分では変化していないことが伺える。

また、作詞者・作曲者の性別による分類では、1980～1994年度版の教科書を対象とした研究結果と比較すると、女性の作詞者・作曲者の割合が増加していた。特に1980～1994年度版の教科書における作曲者については、女性は0%という結果だったが、2002年度版では全体の5.5%という結果が出た。教科書作りにおいて、ジェンダーの視点の導入が徐々に浸透していることが伺えるが、まだまだ男性作曲者が圧倒的に多いことも事実である。

教科書編著作者の性別による分類についても、1980～1994年度版の教科書と比較すると女性の編著者が採用されるようになってきている。しかし、教育芸術社の教科書だけには依然として女性の編

集者は1人も採用されていない。また、全体の比率も男性編著者が小学校は77.8%、中学校は88.2%であるのに対して、女性編著者は小学校が13.9%、中学校が8.9%であり、編著者においても男性が圧倒的に多いことがわかった。しかし全体を通して、以前より少しずつ女性が教科書編集に参加するようになってきている。

また、挿絵や写真においてもジェンダーの視点を意識したと考えられる箇所が所々に見られた。教科書の中の性差別的表現は、徐々にではあるが以前と比べて改善され、今後もそのような傾向が進むように思われる。

本研究は大学院の演習の授業の中で扱った教科書研究の報告である。教材を通し学習者である子どものたちの中に何が育ち何が形成されていくのかを考えるのが教材研究であり教育研究であるとするなら、ジェンダーの視点から日常扱う教材について再検討を加えることも重要であるように思う。ジェンダーの視点を導入することで、その教材の持つ本質のある面があぶり出され、教材としての適否を問う際の判断材料となるであろう。

興味深かったのは、いくつかの歌唱教材の歌詞や挿絵の評価に関し、共同研究者内の女性と男性との間で時折意見の食い違いを見せたことである。同一の教材に向き合っても、男性が看過していた問題点や差別性を、女性は自身の学校文化を通しての経験から指摘していた。たとえば女性によって語られる歌唱教材の主体語の「ぼく」への違和感の大きさは、男性の想像の範囲をはるかに超えている。そのことは、たとえ「同じ学校で同じ授業を受けていても、女子生徒と男子生徒は、その性別にしたがって異なる日常を経験」（木村 1999）しているということを示唆する場面のように思われた。本稿では、そのような議論の対象になった教材についても切り捨てず、考察と記述の対象とした。尚、本稿に関する文責は中山にある。

#### （引用及び参考文献）

- 伊東良徳・大脇雅子他（1991）『教科書の中の男女差別』明石書店
- 木村美栄子・中山裕一郎（1994）「性差意識の形成と音楽教育～教科書分析を中心に～」『教育学研究紀要』第40巻 第2部 中国四国教育学会 pp. 341～346
- 木村美栄子・中山裕一郎（1996）「性差意識の形成と音楽教育(2)～音楽科教科書の分析を通して～」『教育学研究紀要』第42巻 第2部 中国四国教育学会 pp. 329～334
- 21世紀教育問題研究会（1994）『小学校全教科書の分析～自立と共生の教育の視点から～』労働教育センター
- 北京世界女性会議に提言する会（1995）「1995年9月4-15日 北京世界女性会議行動要領日本語訳（1995年9月15日版）（第2版） p. 25
- 小川真知子・森陽子編著（1998）『実践 ジェンダー・フリー教育（フェミニズムを学校に）』明石書店
- 木村涼子（1999）『学校文化とジェンダー』勁草書房, p.45
- 亀田温子・館かおる編著（2000）『学校をジェンダー・フリーに』明石書店

（2003年9月25日 受理）